日蓮聖人に於ける「願」の研究

上田本昌

一

仏陀出世の目的は、その究極に於て一切の大衆を救済すると云う大願を、成就せしめる為のものに他かならないとされている。仏教が「願」の宗教であると云はれる理由も、又これに依るものとも考えられる。従って、仏陀の正法を継承し弘通された日蓮聖人に於ても、其の生涯は、此の「願」を達成せしめるために、挺身されたものであると云って、敢えて過言ではないであらう。

若し然らば、宗祖は仏陀の「願」をどのように受継ぎ、また其の願を如何に「行」の面で実践されたであらうか。蓋し此の問題は、宗祖の教学を特色づける根本の一つとして、深意を持つものと考えられるのである。これより本問題に就いて、その一端を考えてみようと思う。

二

先ず仏教に於ては、小乗・大乗に依り「自度の願」と「他度の願」にわかれて、各経典群には無数の願行が説か

れ、それぞれ其の特色を有しているが、此等諸願の究極は、大乘の諸経典に於て一応共通の「総願」と称されている「四弘誓願」に在るのではないかと思われる。宗祖も此の願について「法華真言勝劣事」及び「小乘大乘分別鈔」等其の他の御書に於て、四弘誓願を満足成就するにあらざれば、衆生の成仏も叶はずと主張しておられるのであって、又これを身延の二祖佐渡阿闍梨日向上人の「御講聞書」に依って見るに、其の巻末に四弘誓願に対する宗祖の講義内容が詳述されている。

それに依れば、四弘の中の衆生無辺誓願度は応身、煩悩無辺誓願断は報身、法門無尽誓願智は智法身、無上菩提誓願証は理法身なりとして、仏陀の三身説を用いているのであり、これは興味ある配当として考えられるのである。此の四弘に就いては、初の一は化他の願であり、後の三は一応自行の為の願であって、「所詮は衆生無辺誓願度をもって肝要となす。」①ことを明らかにし、四弘に於ける中心の所在を指示しておられる。これは宗祖にとって、「仏使」としての立場から考え、衆生済度を以て第一とすることは当然の説であったらうと思われる。更に同書では四弘の「弘」についての意義を、「所謂上行所伝の南無妙法蓮華経」に在るとし、弘通の法を明確にしている。これに就いては法華経を中心とする宗祖の主体的立場からするとき、必然的に法華経を選び、其の法を広布するための誓願にほかならない、と解釈せられたものであろうと考えられる。故に「所詮誓願と云ふは題目弘通の誓願也。」②と講じている。此の説は四弘の解釈として見たとき、一見飛躍があるようにも見られるが、然し宗祖自身の信仰的意志と、それに依って得た内証自覚と、更に実践的思惟による法の体験とに依って、真実であると是認されるに及んで、始めて述べられるに至ったものであらう。従って、

今末法ニ入テ法華経ノ行者ハ四弘能所感応ノ即身成仏ノ四弘也云云。③

と云い、「上行菩薩の四弘誓願も此の文なり、深く是れを思案すべし」とも述べておられるのである。此の場合《感応》と云う言葉には、法華経の色読体験が意味されてをるのであって、宗祖にとり深遠な意義を抱いておられたものではないかと考えられるのである。また「法華経の心は能所一体なり」④とも説かれているが、先きの能所感応と云い、此の能所一体と云うも、共に以信代慧の信行に関して、ニューアンスをもった語と云えよう。

然して、大乗に一応共通な総願とも云はれている四弘の一般的研究は、既に先師に依ってなされている処であるが、就中、塩田義遜博士の説に依れば、長阿含第八の散陀那経に早くも菩薩の四弘の思想が発芽してをり、小乗自度の四諦が、大乗の四弘の基本となっていることを、本業瓔珞経に依って明らかにし、更に心地観経等に依って四弘の具体的成立過程を考証されているので、⑤此処では其の間の考察を省略し、直に宗祖自身の四弘観にふれつゝ、願の内容を探ってみようとするものである。

そこで、斯うした宗祖の四弘に対する講義は、晩年身延山に於ておこなわれたものであり、願の一部的解説であって総てを意味するものではない。それ以前、鎌倉・佐渡の両時代にあっては、どのような願に対する考え方を持っておられたであらうか、また宗祖自身は如何なる立願をされたのであらうか、と云う問題から、逐次四弘に及んで行きたいと思う。

三

宗祖の生涯に於て、願を中心として見たとき、最初に思い浮ぶことは、幼少にして清澄山に登り、道善房について出家得度し、彼の智慧と慈悲を施与すると云う虚空蔵菩薩に「日本第一の智者となし給へ」⑥と結界参籠して必死に立

願せられたことである。青年学徒として又一求道者としての立場から、これは一応自度の願であるとみなして、四弘の中では第三の「法門無尽誓願智」に配することの出来る願である、とみることが出来うるであらう。此の願については、「善無畏三蔵鈔」及び「清澄寺大衆中」にくわしいが、所謂、当時一般に流布していた真言・天台を始め八宗十宗と云はれる諸宗について、就中、盛んであった浄土信仰に対し、一つの大いなる疑問を持ち、これに対する解答を得んものとして、諸経典の深理を修学されたのである。

当時の宗祖は、今生に於て即身に成仏をうることの中に、人生の意義を感じておられたのであり、浄土の往生信仰が隆盛していたにもかゝわらず、是れに疑いを抱かれたのである。所謂、宗教的根本の信に関する問題解決の為であり、これは仏智による以外に解答をうることが出来なかったからである。即ち、「実乗の一善」を選択するために、日本第一の智者たらんことを発願されたのであって、爾来、建長五年（一二五三）清澄寺に於て立教されるに至るまで、二十余年に亘り、ひたすら学行に精進されたのであって、其の結果は、

日本国の八宗竝に禅宗・念仏宗等の大綱粗伺ひ侍りぬ。⑦

と述べられている如くである。更に諸経論及び諸宗の失を弁えることの出来たのは、虚空蔵菩薩の利生に依るものであるとしている。是に依って思うに、仏法を習い極めることによって、仏陀の真実教を把握し、邪見の宗旨を正して国家・社会を救い「人々をたすくる」ための発願であると云うのであってみれば、其の根底に於てただ単に自度のみに中心を置く、小乗的願とは大きなへだたりの在ることを知ると同時に、そこには又必然的に他度の願たる衆生済度と、基本に於てつながりを持った立願であると思えるのである。

次に宗祖は、「守護国家論」及び「立正安国論」を中心として、天変地夭の災害、竝に内乱外寇の国難について国

家を守護しようとする「国土救済の願」を立てられたことである。

所詮天下泰平国土安穏ハ君臣ノ所レ楽土民ノ所レ思也。夫国ハ依レ法ニ而昌法ハ因レ人ニ而貴シ。国亡ビ人滅セバ仏ヲ誰カ可レ崇キム。法ヲ誰カ可レ信ヤス哉。先ヲ祈リテ国家ヲ須クレ立ツ仏法ヲ。⑧

と述べ、宗祖自身が鎌倉の辻に立って、国土安穏の願を成就せしめる為に、其の基本となる国家を危機から救う方法を主張されたのである。即ち、苦なるが故に現実を否定し、浄土を来世に思慕し求めようとする信仰、及び其の信仰を裏付けとする政治・思想を癒し、あるがまゝの現実界に即して、その中に浄土を建設しようとする「娑婆即寂光の願」を成就せしむべく、身を以て此の願の実現に注がれたのである。これは明らかに他度の願であり、当時先ず実行せねばならなかったのは、国土を危機から救護することが急務であったのであり、謂ば「仏国土建設の願」とも云うべき此の願が、始めに立てられたのである。又此の願は単に宗祖初期の立願とするのみではなく、次に述べる衆生済度の願と同様に、依正二報に亘っての救済の大願であり、所謂、立正安国の理念に基ずいたもので生涯を通じて此の願の実現に資せられたものであると云えよう。即ち、「安国論」に依れば、仏国土建設の願を達成せしめる唯一の方法として、大衆が「実乗の一音」に帰すべきであることを挙げておられる。

爰に於て、宗祖は自らが法華経の題目を受持信行し、弘通することに依って国土を救済しようとする願から、更により多くの大衆に向って、法華経を受持せしめ、大衆自身にも広く弘通の道を進ましめようと、せられるに至り、法華為本の思想に基く政治・文化の発展を目されたのである。所謂、「一切大衆済度の願」であって、願の対象が「国土」から「大衆」へと、展開して来るのである。これは宗祖が「先ず国家を祈りて」と云う救国を第一と考えられたことに依るものであらう。然して此の「衆生済度の願」は、やがて後に述べる如き〈仏使〉として、また〈本化上

行〉としての使命に通ずるものであり、従って法華経の教主釈尊が立てたところの

我レ本立ニ誓願一欲レ令ニ一切衆生一如レ我等無レ異　如ニ我昔所願一今者已ニ満足化ニ一切衆生一皆令レ入ニ仏道一⑨

と云う十界皆成の本願に当るものであると云えよう。此の願は即ち、四弘に於ける初めの「衆生無辺誓願度」の願と直接つながりを持つものであって、宗祖の場合は、

日蓮は去建長五年四月二十八日より、今弘安三年十二月にいたるまで二十八年が間、又他事なし。只妙法蓮華経の五字七字を日本国の一切衆生の口に入れんとはげむ計り也。此即母の赤子の口に乳を入れんとはげむ慈悲也。⑩

と云はれている「諫暁八幡抄」の文からするとき、其の一代が此の無辺度生の願に依って貫かれていたことが知れるのであり、前記の仏の本願をそのまゝ受ついで、〈仏使〉の立場から願の実践がなされたものとみることが出来るであらう。

次に右の文を更に徹底せしめている言葉を、開本両鈔の中から直接拾って見るに、先ず開目鈔には

釈迦・諸仏の衆生無辺の総願は皆此経に於て満足す⑪

とあり、また本尊鈔には

如ニ我昔所願一今者已満足。化ニ一切衆生一皆令レ入ニ仏道一。妙覚釈尊我等血肉也。⑫

とあって、何れも仏の本願たる無辺度生の願が、法華経に於て成就されたものとし、因行果徳を備えた題目の受持に依って、自ずと仏の本願に叶うものとし、其の受持一行を大衆に実践せしむべく、立教の当初より「国土」と「大衆」の済度を目的とする弘法の誓願が立られたものと考えられるのである。言換れば仏の十界皆成の本願は、其のま

丶法華経を通して宗祖に依って受継がれ、題目の受持によって「国土安穏の願」及び「無辺度生の願」等の所願が成就されるべく、実践による「行」がおこなわれたのである、と見ることが出来るのではなからうか。

前述の如く、四弘をもって大乗経典に共通した総願である、と一応言いながらも、此のように法華経を通して四弘の実践に、〈仏使〉と云う立場から終始された点に於て、宗祖の「願」に於ける意義と、他に見られない特色が在ると云えるであらう。又此の願の実践が、いかに徹底したものであるか、について「顕仏未来記」では、

日蓮存二此道理一既二十一年也。日来災月来難此両三年之間事既及二死罪一。乃至、願損レ我国主等最初導レ之。⑬

と語っており、そこには此の願の実行にともなって生ずるあらゆる迫害障壁について、これを乗り越えて行く決意と、其の献身的な跡とが窺えると同時に、仇に対してさえも導きの手をさしのべようとされた、愛憎を越える慈悲の広大さと願の崇高さが知れるのである。

四

如上の観点よりするとき、宗祖は本来弘誓の願行に出ているのであるから、苦行迫害は問題とせず、其の行動は常に末法に於ける導師としての使命に燃えて、難を避けることをせず、進んで苦難の道を選び、依正の二法を救うと云う〈本化の誓願〉に立って、運動を展開されたのである。然も此の運動を達成するの道は、本化として付属を受けた法に依る以外にないことを、明らかにした宗祖は、

日本国に此をしれる者、但日蓮一人なり。これを一言も申し出すならば父母兄弟師匠に国主の王難必来るべし。

いわずば慈悲なきににたりと思惟するに、法華経涅槃経等に此二辺を合せ見るに、いわずわ今生は事なくとも、後生は必無間地獄に堕べし。いうならば三障四魔必競起るべしと知ぬ。二辺の中にはいうべし。⑭

と述て此の間の事状を明かにしている如く、既に三障四魔を覚悟した上での、導師としての慈悲から発している誓願たることに、疑いはなからうと思える。

かゝる宗祖の弘誓と、其の内容及び決意を最も端的に表明しているのが、佐渡に於て示された「開目鈔」の三大誓願である。

詮するところは天もすて給へ、諸難にもあえ、身命を期とせん。⑮

と云う語の中には、鎌倉から佐渡へ至るまでの弘法活動中に加えられた難の甚重なることを物語るものであり、

本ト願を立ツ、乃至、我レ日本の柱とならむ、我レ日本の眼目とならむ。我レ日本の大船とならむ、等とちかいし願、やぶるべからず。⑯

との三誓は、かゝる難に堪え忍ばれて来た上での、如来使としての自覚を表明されたものとみなすことが出来うるであらう。

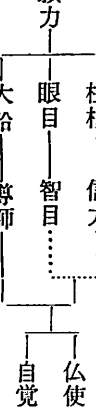
此の三誓で「柱」と云うのは、「日蓮は日本国の棟梁也。予を失うは日本国の柱(はしら)を倒すなり」とある如く、「棟梁」と云う語によっても現されている。即ち、国家を負うて立っと云う本願力が窺えるのであり、「眼目」とは所謂智目の意を持つものにして、国家を救う中心眼目たるの自覚の現れであるとも考えられる。又「大船」とは、即ち大船師・導師の意であるから、此の三誓は国土と大衆を救済すべき、願力と導師と自覚とを明らかにしたものである、と解することが出来得るのではなからうか。

此れは法華経薬草喩品の、

未レ度者令レ度。未レ解者令レ解。未レ安者令レ安。未二涅槃一者令レ得二涅槃一。⑰

とする菩薩の四誓を宗祖の立場で更に実践的に明確なものとした本願でもあらうと考えられる。即ち、法華経に於ける仏陀の本願は、直に宗祖に依って実践化され、具体化されたものであると思えるのである。宗祖の場合、誓願を立てると云うことは、頓にそれが実行を伴うものであり、「願」と「行」を切り離して見ることは不可能である。所謂「誓願とは題目弘通の意なり。」とする宗祖の決断は、法華経に依る〈信心為本〉の主体的な体験の中から出たものとして考えられうる。

更に、此の願行は「日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華経は萬年の外未来までもながるべし。」と云い又「一天四海皆帰妙法」を標榜する宗祖にとって、凡ての願行は究極に於て〈仏陀の慈悲〉につながるものであると同時に、〈仏陀の本願〉に当るものであると云うことが出来よう。換言すれば、宗祖の誓願は「行」であり、此の行は「慈悲」から発しているものであることが、知れるのであって、此処にまた宗祖の宗教に於ける実践を旨とした「事」の本質的意義を窺うことが出来ると思うのである。



五

斯うした宗祖の「願」は、是を要するに、仏陀が大衆を教化するに当って、先づ立てられた本願を、そのまゝ法華経を通して受け継ぎ、自身に与えられた「仏使」としての使命として、願の成就に向って実践がなされたものである、と見なしてさしつかえなからう。即ち、本化に対しておこなわれた要法の付属と同時に、法華経の願の相承も合せて受け継がれたものと見ることも、あながちに不可能とは云いえないであらう。

法華経の願とは、前述の如く既に方便品・薬草喩品等を始めとして、寿量品に、

毎自作二是念一　以レ何令下衆生　得下入二無上慧一　速成二就仏身一上⑱

とある文に依っても明らかな処であるが、また仏は「如我昔所願今者已満足」とも説いている。即ち、法華経をもって、本願所行成就の経典と見ていることが知れるのである。従ってまた宗祖も、此の経に依って四弘誓願を始め、本願としての三大誓願等其の他の諸願をすべて成就せしむべく、受持と弘通の実践がなされたものと見ることが出来えよう。

宗祖にとって三大誓願は、自身の宗教と其の「行」が、如何に徹底したものであるか、を示すものであると同時に、此れはまた総願と云はれる四弘誓願を、より一層具体的な形でもって、的確に示したものであり、宗祖の生涯を通じて、最も大きな願目であったらうと思われる。即ち、一代の願行に於て、〈釈尊―上行―日蓮〉の内相承に依る「付属の法」を伝播する上に、僧俗の迫害をのりこえ、幕府の弾圧に縛られず、富貴と権力に束縛されない自由な立場で、然も豪邁に布教伝道を進め、当時の厭世思想を中心とする宗教の改革を論じ、更に「一天四海皆帰妙法」の仏国土建設を以って、究極の願行と判じ、其の実践に専心したところに宗祖の「願」と「行」とに於ける強力な特色が存するものであると見なすことが出来るであらう。

こうした宗祖の願行に於ける「力」はどこから生れて来たものであらうか、と云うに「日蓮は閻浮第一の法華経の行者なり」[19]と云う本化の自覚にもとずくものであって、あくまで、自主的な精神態度に依り養はれたものである。本願力と云はれる力は、法華経の本願を信ずる心から発するものであり、故に又「開目鈔」の中で、

日蓮だにも此国に生れずば、ほとをど（殆）世尊は大妄語の人、八十万億那由佗の菩薩は提婆が虚誑罪にも堕ねべし。乃至、今の世を見るに、日蓮より外の諸僧、たれの人か法華経につけて諸人に悪口罵詈せられ、刀杖等を加らるる者ある。[20]

と、仏の未来記と符合した忍難弘道の献身的な跡を以って、〈仏使〉としての自負と誇を、巌の如き自信の上に持っておられたことが知れるのであり、此処からまた日本は勿論のこと、遠く唐・天竺に至るまで、すべての国土に妙法の五字七字を弘伝し、初期に抱かれた「立正安国」の妙相実現を目して、ひたすら精進を続けて来られた生涯であると云えよう。此の生き方は、世界の平和と安穏を以て本願とした仏の生き方に通ずるものであり、仏教に於ける究極の理想であって、又同時に最大の願目でもある。

次に、宗祖は此の願目について、法華経の「以信代慧」の文によって信心為本による行法を立てられ、専ら「受持」の一行を強張し、他のあらゆる「行」に代るべきものである、とみなしておられるのである。即ち、「本尊鈔」に於て、末法下種の妙法五字を解説し、

釈尊因行果徳二法妙法蓮華経五字具足。我等受持此五字自然譲与彼因果功徳。四大声聞領解云無上宝珠不求自得云云。[21]

として、更に「所化以同体」とも述べているのである、〈一切皆成〉の願目を達成する為の直道は、此の受持以外に

ないことを認め、五字の三業受持をもって、本願成就の基本的要件と考えておられたようである。即ち、受持に因る〈以信得入〉が本化の信行であり、宗祖の宗教が〈受持の宗教〉であると云われる所以も、また此処にあると云えよう。

尚、彼の浄土教に示されている本願は、云うまでもなく阿弥陀如来による他力の往生成仏に主眼が置かれてをり、親鸞はこれについて「他力といふは如来の本願力なり。」[22]と述べ、他力信心とは阿弥陀の『往生本願』を信ずることであると解している。同じく本願と云われながらも宗祖の法華経による『即成本願』の場合と対比して見るとき、そこに内容的差異の大なるものが存することに気付くのである。

六

宗祖は、法華経の立場から釈尊久遠の本願とも云うべき婆娑即寂光の唱題受持による『即成本願』をもって、その究極とみなされたのである。浄土は飽くまでも彼岸の世界であり、「往生本願」は必然的に来世の浄土を思慕する念が強いものであって、やがては厭世的傾向をたどるものと云えよう。かゝる浄土教の他力本願説に対して、唱題即成を主張する宗祖にあっては、此岸の現実国土に寂光土を建設しようとする本仏の本願を受継がれたものであり、積極的態度から〈立正安国〉が叫ばれ、〈皆帰妙法〉の理想実現化が展開されたものであると云える。

「日蓮は少より今生の祈りなし。たゞ仏に成らんと思う計りなり。」[23]との一文は、まさに斯うした宗祖の現実即成の願を最も端的に表明したものと云うことが出来るであらう。

言い換れば、四弘誓願から発して三大誓願を経、更に法界帰妙の即成本願に至るまでの、宗祖に於ける願思想に在

って、其の根底に流れているものは何かと云うに、

㈠ 「仏使」としての使命達成を目して、法華経の立場から仏陀の本願を受継ぎ、自ら忍難弘教の願行を立てた献身的自主自律主義であり、

㈡ 無辺の衆生を救済し、国家社会を浄化安穏ならしめようとする唱題受持の即成本願を基とする本化の利他主義であって、これは更に、

㈢ 実乗の一善たる法華経の「色読」に徹した実践信仰を重視する「事」の思想にあると云えよう。

かくして宗祖の一代に於ける究極の願は、前述の如くすべて仏陀の大きな「慈愛の本願」に帰着するものとして考えられるのであり、全人類の平和と安穏を図る為のものに外ならない。

凡そ人間生活に於て、理想・希望を持たない者はいないであらう。如何なる立場に置かれていても、常に何らかの形で願望を所持しているものである。一世の聖者と称さるる人にあっては、またその願望も高く大きく、そして浄らかなものでなくてはならないのは当然であるとも云えよう。然し、宗祖の「願」が是の如く崇高にして且つ偉大であり、限りなき仏の慈悲心に発し、たぐいなき実践力をもって本願所行の道を進まれたことは、他に其の例を見ることが出来ないものと云えるのではなからうか。

〔注〕

①御講聞書　昭定三ノ二、五九五　②御講聞書　昭定三ノ二、五九五　③御講聞書　昭定三ノ二、五九六

④御講聞書　昭定三ノ二、五九六

⑤「棲神」才三十三号に、塩田博士は「法華経に於ける願と受持譲与」と題して、詳細にされている。

⑥普無畏三蔵鈔　昭定一ノ四七三　⑦普無畏三蔵鈔　昭定一ノ四七三　⑧立正安国論　昭定一ノ二二〇
⑨法華経方便品　大正九ノ一ノ八b　⑩諫暁八幡抄　昭定二ノ一八四四　⑪開目鈔　昭定一ノ五八一
⑫本尊鈔　昭定一ノ七一一　⑬頭仏未来記　昭定一ノ七四二　⑭開目鈔　昭定一ノ五五六　⑮開目鈔　昭定一ノ六〇一
⑯開目鈔　昭定一ノ六〇一　⑰法華経薬草喩品　大正九ノ一ノ一九b　⑱法華経寿量品　大正九ノ一ノ四四a
⑲別当御房御返事　昭定一ノ八二八　⑳開目鈔　昭定一ノ五五九　㉑本尊鈔　昭定一ノ七一一　㉒教行信証　行巻
㉓四条金吾殿御返事　昭定二ノ一、三八四